

日・中関係一〇〇年を問う〜二十一世紀を見据えて

——中国語学科創設十周年（一九九七年）記念シンポジウム——

まえがき

大 里 浩 秋

これから掲載するのは、表題にあるごとく、中国語学科が創設十周年を迎えて開いたシンポジウムにおける発言の全内容である。中国語学科は、一九八八年四月に第一期生を受け入れて以来、神奈川県内外の多くの方々のご支援を得て順調に基礎を固めながら十周年目を迎えることができた。その際、それを記念すべ

く準備されたのが、一つには論文集の出版であり、もう一つにシンポジウムの開催だった。論文集は、学科の同僚はもちろん、他大学の優れた研究者にも執筆をお願いして、語学、文学、歴史の三分野で一冊づつの本として公刊することができた（『中国民衆史への視座』・『中国通俗文芸への視座』・『現代中国語学への視

一方シンポジウムは、九七年十一月二十六日の午後
に本学セレストホールで実施した。その日はあいにく
の雨模様であったが、二〇〇名を越える参加者があり、
中島三千男外国語学部長のあいさつをいただいたあと
に、後掲の順に熱のこもった発言が展開されたのであ
る。

ここで、五年経った今になってなぜあの時の発言を
掲載するのかについて、やはり一言説明する必要がある。
実をいうと、開催直後に学校の内外を問わずど
こかの雑誌に掲載したいものだと考えたことがあり、
打診の過程で要約ならば載せてもいいという話もあつ
たが、それはいかにも半端なのであきらめた経緯があ
る。ただ、いつか利用することもあると、当日のテー
プをおこしたものを残していたので、時折思い出すこ
とがあり、今回の掲載につながるようになった。内容
の重要性、おもしろさが、五年を経てなお、いささか

も減じていないと判断したのが、無論今回の掲載にこ
ぎつけた第一の理由である。あの時はまだ二十世紀の
うちだったので、二十一世紀の間もなくの到来を見据
えて、これまでの一〇〇年間の日中関係の内実を問う
というテーマであったが、あの時各氏が指摘した多く
の問題は、新世紀に入った今でも耳を傾ける内容を具
えている。さらに日中関係にとどまらず、目を朝鮮と
の関係に広げた時、拉致問題での北朝鮮の行為を批判
する余り、かつての植民地朝鮮の人々に対して行つた
数々の悪業（拉致との対比でいえば、何万、何十万と
知れぬ強制連行があつた）に思いを馳せることができ
ない日本人のバランスの悪さを少しでも克服する努力
をしなければと痛感するのであり、その意味でも、こ
のシンポジウムの内容は熟読含味する価値があると思
うのである。

ここで、発言の順に各氏を簡単にご紹介する。基調
報告を担当した小島晋治氏は、中国近代史が専門で、

東京大学教授を経て本学で教えられ、このシンポジウムの翌年に退職された。小島先生には、発言再現に因んで二〇〇一年に寄せて下さった文章があるので、変則的ながらそれを基調報告のうしろに置くことにする。コメントを担当した尾上兼英氏は、中国小説史が専門で、東京大学教授を経て本学で教えられ、シンポジウムの翌々に退職された。沢田ゆかり氏は、中国現代経済が専門で、当時本学で教えられたあと、東京外国語大学に転任されて今に至っている。戴国輝氏は、台湾史、台湾農業経済史が専門で、長く立教大学で教鞭を執られたあと、シンポジウムの前年に故郷台湾にもどられたが、二〇〇一年春、病気で急逝された。田畑光永氏は、中国の外交・政治が専門で、本学国際経営学部で教えておられる。莫邦富氏は、上海外国語大学講師を経て来日留学されて以来、作家、ジャーナリストとして現代日中関係について発言されている。司会は、日中関係史が専門の大里浩秋が担当した。

上述の紹介でふれたことだが、発言された各氏が今もお元気で活躍されている中、戴国輝先生が突如お亡くなりになってしまったのは痛恨の極みである。このシンポジウムで先生は、長年住んで日本をよく知る一台湾人として、過去に侵略し植民地としたアジアの人々への理解が、日本人には欠けていると批判してやまなかつた。他の先生方には直していただいたテープおこしの原稿をみていただくことはかなわず、私が代行するしかなかったが、不出来な直しであることを承知でいえば、先生の面目躍如たる発言の骨格は、辛うじて再現することができたように思う。以つて先生への追悼の気持ちに代えたい。

最後に、シンポジウム当日に配布した基調報告とコメント要旨は、ここでは掲載を割愛することをおことわりする。